

絵図・絵葉書等で見える大仏殿



長良川明七橋版画(部分) 明治7年(1874) (岐阜市歴史博物館蔵)



美濃乃魁 明治16年(1883) (岐阜市歴史博物館蔵)

濃尾震災で倒壊を免れたことが
分かる貴重な写真。



正法寺大仏殿 明治24年(1891)頃 (岐阜県地方気象台蔵)



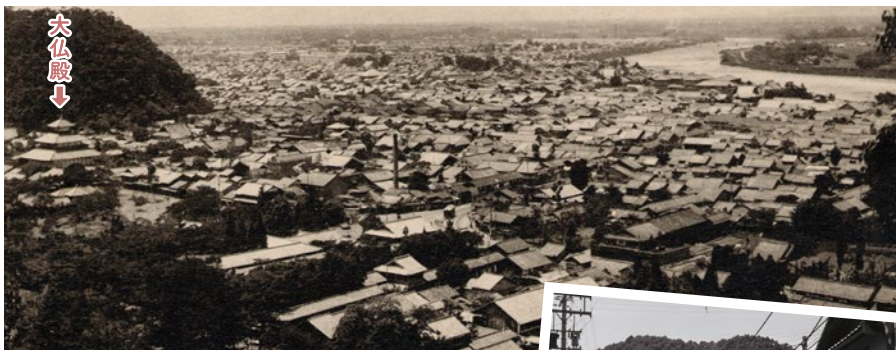
絵葉書 岐阜大仏殿 明治43年(1910) (岐阜県歴史資料館蔵)



雪の大仏殿 昭和38年(1963)頃 撮影 北洞南一



岐阜市鳥瞰図 吉田初三郎筆 (部分) 昭和12年(1937) (岐阜市歴史博物館蔵)



絵葉書 岐阜公園丸山より市街の一部を望む (岐阜市歴史博物館蔵)

正法寺大仏殿・岐阜大仏へのアクセス

バス停「岐阜公園・岐阜城」から徒歩3分
〒500-8018 岐阜市大仏町8番地 電話 058-264-2760

正法寺は重要文化的景観「長良川中流域における岐阜の文化的景観」の重要な構成要素、
日本遺産「「信長公のおもてなし」が息づく戦国城下町・岐阜」の構成文化財です。
大仏殿は市重要文化財、大仏は県重要文化財に指定されています。



大仏殿前 昭和41年(1966)

令和7年3月発行 発行：岐阜市ぎふ魅力づくり推進部文化財保護課 〒500-8701 岐阜市司町40番地1 電話 058-214-7157

金鳳山 正法寺



正法寺大仏殿全景(西から)

正法寺の大仏は、江戸時代後期に、
金華山麓のかつての岐阜城下町に誕生しました。
今では「岐阜大仏」の名で親しまれていますが、
昨今の調査により、大仏だけでなく、
大仏を安置している大仏殿にも
歴史的な価値が高いことが
明らかになってきました。
本紙では、調査成果をふまえつつ、
正法寺のはじまりから岐阜大仏の誕生、
そして現在にいたるまでの
歩みについて紹介します。

岐阜大仏

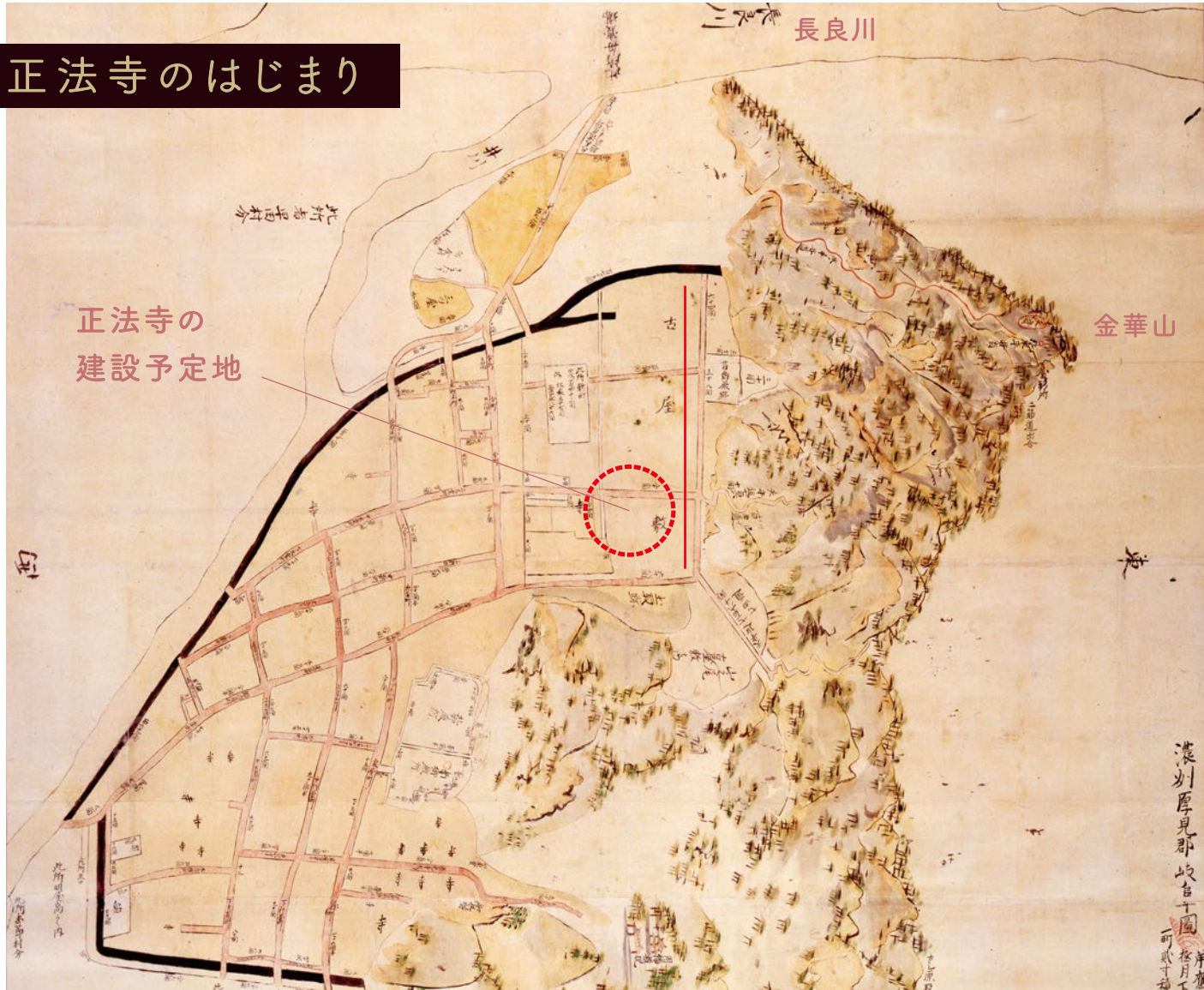
岐阜大仏殿

金鳳山
正法寺

岐阜大仏
大仏殿

金鳳山正法寺は、江戸時代初期に中国から伝わった黄檗宗の寺院で、黄檗山萬福寺（京都府宇治市）の末寺です。その創始は、天和3年（1683）に広音和尚が金華山麓に草庵を結んだことにはじまります。この背景には、当地域を治めていた尾張藩の藩主徳川光友の意向が働いていた可能性があったと考えられます。正法寺が創建された地域は、岐阜が城下町であった時代に、城主の家臣の屋敷が並んでいた地域でした。しかし、慶長5年（1600）の関ヶ原合戦ののちに岐阜城は廃城となり、城主の家臣たちが住んでいた城下町もなくなりました。金華山麓の屋敷跡地区は、しばらくはそのまま放置されていた状態だったようで、当時「古屋敷」と呼ばれていました。このあたりを描いた承応3年（1654）の絵図には、「古屋敷」の文字が確認できます。江戸時代に入ると、古屋敷を含む地域（＝岐阜町）は幕府直轄地を経て、元和5年（1619）に尾張藩の領地となりました。それから約40年後、尾張藩の2代藩主徳川光友の時代になり、それまで放置されていた古屋敷の開発が始まりました。尾張藩は、承応3年（1654）に岐阜町に対して掟を発給したことを皮切りに、初めての町絵図の作成（承応の絵図）、住民情報を把握するための家並改の実施、明暦元年（1655）に古屋敷で新たな町（上茶屋町・下茶屋町・木挽町・山口町）の取り立てを行うなど、岐阜町支配の基盤を整えていきました。正法寺の創建は、このような古屋敷開発策の一環として行われたのです。

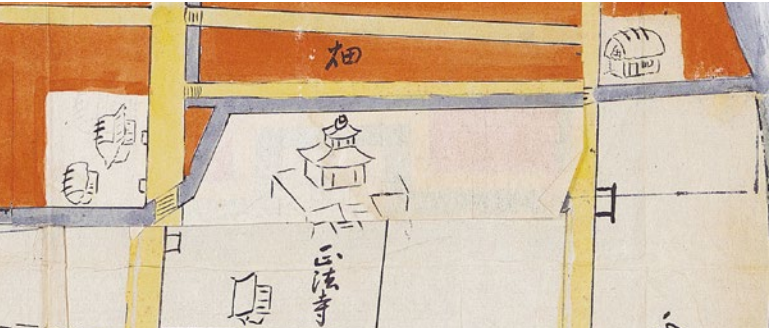
正法寺のはじまり



濃州厚見郡岐阜図（部分） 承応3年（1654）（名古屋文庫蔵）

なお、広音和尚の生涯をまとめた『正法第一代広音和尚行状』（萬福寺文華殿蔵）によれば、正法寺創建の経緯について、広音が「大休（広音の師）の「金華山麓で新たに寺を興すべし」との指示に従って草庵を結び、千呆（大休の師、萬福寺第6代住持）を開山に迎えたことが記されています。大休は当時、名古屋の東輪寺の住持を勤めていました。東輪寺は、延宝2年（1674）に徳川光友により創建された黄檗宗寺院であるため、このことから、正法寺創建への尾張藩の関与が想像されます。正法寺が創建されてまもなくの頃の状況は詳しくは分かりませんが、貞享4年（1687）に尾張鳴海宿の庄屋で俳人としても知られた下里知足が、谷汲参詣の途中に正法寺で泊まって鵜飼を見物した記録が残っていることから、この頃には草庵から寺としての形に整えられていったようです。しかし、正法寺の記録によれば、元禄末頃（1703頃）には火災で焼失してしまったようです。現在、大仏殿内に安置されている千呆坐像が正徳3年（1713）の作であるため、正法寺は焼失後まもなくして再建されたと考えられます。

大仏殿建立に伴い
道と水路が付け替えられました。



岐阜御山附近図（上の図は大仏殿部分）（岐阜県図書館蔵）



大仏胎内 頭部構造



大仏胎内 体部の内部構造

大仏ができるまでの状況は、諸資料から確認することができます。寛政6年（1794）には、加納藩士田辺政六が正法寺を訪れたときのことを記録しています。このとき大仏殿はまだ建っておらず、大仏の頭部と五百羅漢像が造られている最中でした。京都方広寺の大仏、奈良東大寺の大仏に次ぐ第三の大仏であると噂にもなっていたようです。さらに、大仏の造像方法にも注目しており、下地を簾で組立て、その上を和紙（一切経）で厚く張り、金箔を施していると述べています。岐阜大仏が現在「簾大仏」の名で呼ばれる所以です。

しかし、実際それが該当するのは頭部のみです。頭部と体部は別々に制作されており、造り方が少し異なります。頭部はまさに簾大仏のごとく、竹を簾状に編み、提灯形に大まかな形を造っています。一方体部は、柱を立てて貫と梁で組み上げ、竹による土壁下地で、竹を縦横に並べて格子状とし、壁土を厚く付けて形を整えています。伝統的な日本壁と同じような技法で造られていることが特徴です。

また、大仏を安置している大仏殿は、大仏造像と並行して建てられました。大仏の像内には「真木」と呼ばれる太いイチョウの木柱が立てられ、天井内に達しています。この真木が大仏殿の小屋組（屋根裏）を直接支えていることから、大仏殿と大仏は構造的に一体のものとしてみることができるのです。このように、大仏殿と大仏は長い年月を費やして完成しましたが、大仏殿の建築部材に残る痕跡調査から、注目すべき事実が明らかになりました。大仏殿は、文化7年（1810）頃に完成したにもかかわらず、その十数年後に大規模な増改築が行われていたのです。



岐阜大仏

©高野友実

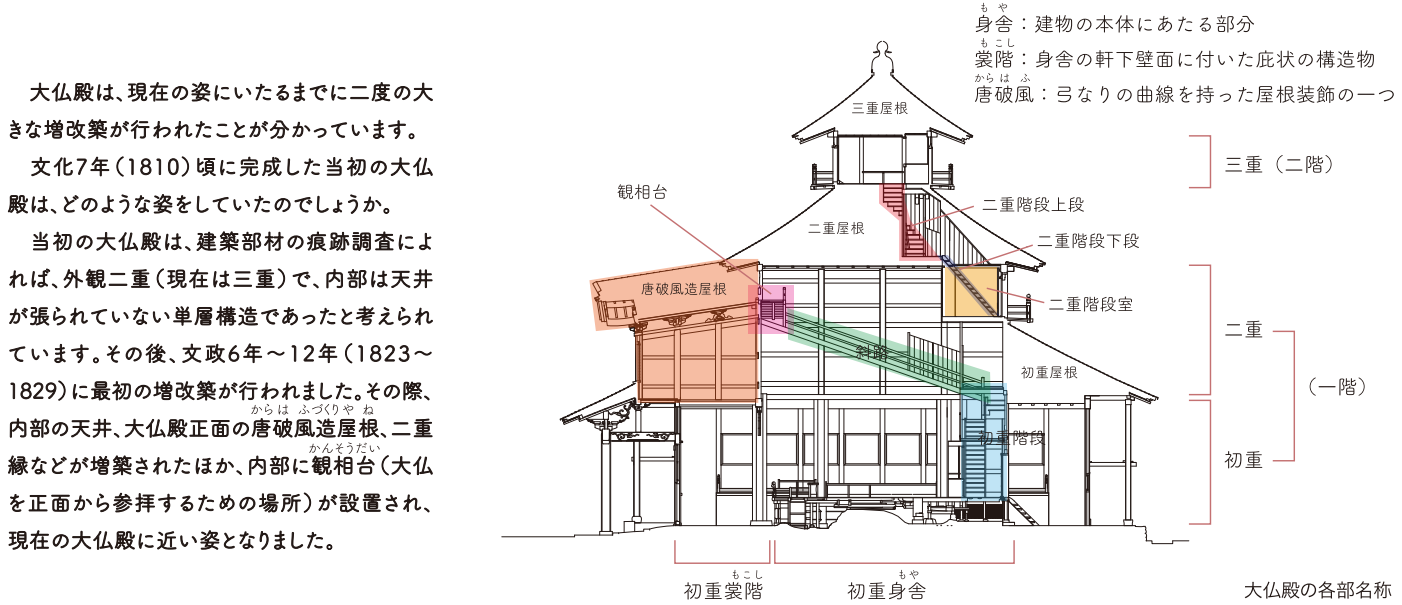
岐阜大仏の誕生

正法寺が創建されて約100年が経過した天明7年（1787）、11代住持の惟中和尚が大仏造立を発願します。なぜ大仏を造ろうとしたのでしょうか？諸説ありますが、諸国の戦乱や天災の犠牲者の追善供養や、かつて主戦場であった当地で亡くなった人々を供養するためであったと考えられています。天明年間は、浅間山噴火や冷害凶作、大飢饉、打ちこわし等の災害・事件が続いた不安定な時期でした。しかし、大仏造立事業は困難をきわめ、完成までには長い年月を費やしました。正法寺の記録などによれば、文化7年（1810）頃に完成し、天保3年（1832）に萬福寺の住持を迎え開眼法会が催されました。このときは、尾張藩主の使者も参列し、織田信長の岐阜入城以来の盛り上がりだったと伝えられています。

鬼瓦に「文化元（1804）」と書かれています。



二重鬼瓦



大仏殿は、現在の姿にいたるまでに二度の大きな増改築が行われたことが分かっています。

文化7年(1810)頃に完成した当初の大仏殿は、どのような姿をしていたのでしょうか。

当初の大仏殿は、建築部材の痕跡調査によれば、外観二重（現在は三重）で、内部は天井が張られていない単層構造であったと考えられています。その後、文政6年～12年(1823～1829)に最初の増改築が行われました。その際、内部の天井、大仏殿正面の唐破風造屋根、二重縁などが増築されたほか、内部に観相台（大仏を正面から参拝するための場所）が設置され、現在の大仏殿に近い姿となりました。

増改築されてきた大仏殿

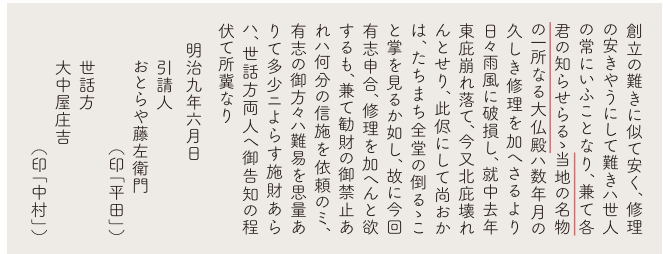


文政7年(1824)の参詣記録

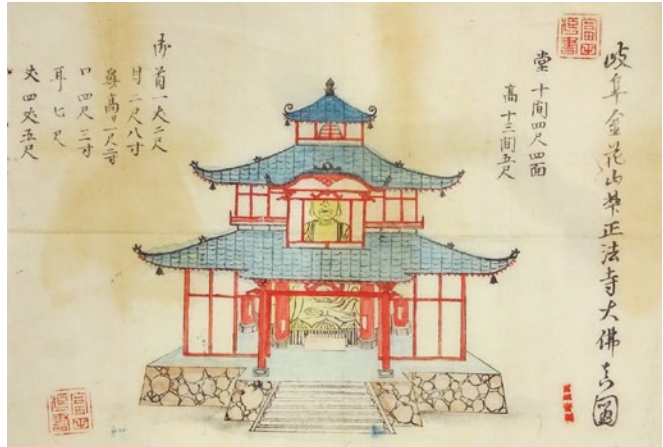


唐破風造屋根天井の雲龍図
左上に龍のうろこ、左下に顔が見える

二度目の増改築はいつ行われたのでしょうか。



岐阜金華山麓正法寺大仏真図 付記 修理募金の趣意書（岐阜県図書館蔵）



岐阜金華山麓正法寺大仏真図 明治9年(1876)（岐阜市歴史博物館蔵）

このとき行われた増改築を裏付ける興味深い資料があります。

一つは、参詣者の落書き（参詣記録）です。過去に大仏を訪れた人々の落書きが、大仏殿の至る所に残されています。その中でも、現在確認できる最も古い落書きが観相台の壁面に書かれています。これは文政7年(1824)に書かれたものであることが確認できるため、この頃に観相台の増築が行われたことが推定できます。落書きは、明治や昭和に書かれたものもありますが、江戸時代の落書きのほとんどは観相台に集中しています。

もう一つが、唐破風造屋根の天井に描かれた龍の絵です。墨で描かれており、経年により目視で確認することは困難ですが、赤外線撮影で龍の絵の存在が明らかになりました。この龍の絵は、文政6年(1823)に寄進されたものであることが分かっています。参詣者の落書きと同様に、増改築の時期を推定するうえで重要な資料です。



明治9年(1876)の大改修 棟札

明治9～10年(1876～1877)、大仏殿の修理とあわせて二度目の増改築が行われました。明治9年に地元有志が中心となって発出した修理募金の趣意書が残っています。そのときの趣意書によれば、当時の大仏殿は今にも壊れそうな状態であったことが分かります。当地域の「名物の一所」である大仏殿を維持するため、寄付金を募り修理を加えるとともに、新たに三重が増築されました。その他に、観相台※への斜路の増築、大仏台座の蓮弁撤去及び須弥壇の変更、大仏殿内に現在安置されている五百羅漢像の修理などが行われました。

このように幾度の増改築を経て、大仏殿は現在の姿になったのです。

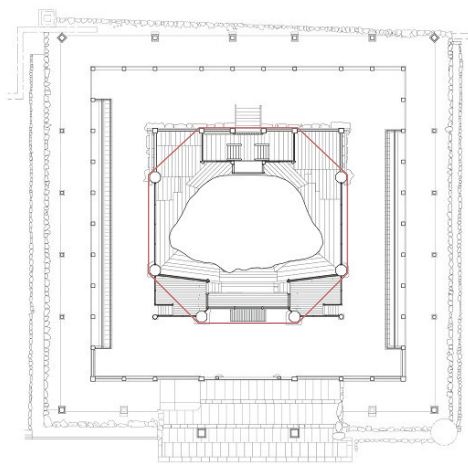
※現在、観相台に登ることはできません。

正法寺関連年表

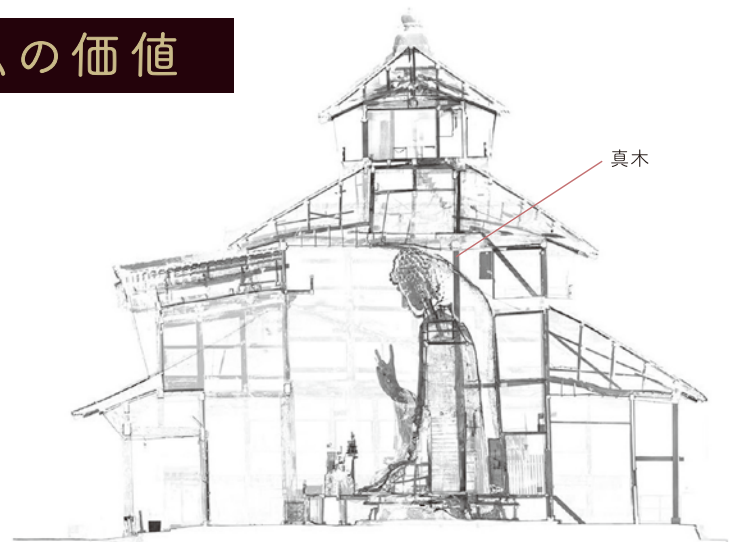
西暦	元号	ことがら	出典等
1654	承応3	この頃、尾張藩二代藩主徳川光友による古屋敷の開発始まる ※岐阜町への掟の発給、承応の岐阜図作成、家並改 等	
1661	寛文元	隠元隆琦（黄檗宗の開祖）来日	
1674	延宝2	尾張藩主徳川光友により名古屋東輪寺が創建される「名古屋市史 社寺編」	
1679	延宝7	大休が東輪寺住持に招かれる ※大休＝正法寺初代住持、千呆の弟子『黄檗文化人名辞典』	
1683	天和3	広音和尚（大休の弟子）が草庵を結ぶ 千呆を開山に迎える ※広音が東輪寺住持の大休を訪ねたところ、金華山麓で新たに寺を興すべしとの指示あり ※地元の中島・賀島・石川らが土地を入手し、広音が住すると、人々が集まって「獅子窟」となった 「正法第一代広音和尚行状」（萬福寺文庫蔵）	大仏殿正面扁額「獅子窟」（寛文13年（1673）、隠元82才の書）
1687	貞享4	下里知足が正法寺に泊まる『下里知足日記』	
1689	元禄2	名古屋東輪寺本尊であった文殊菩薩像が正法寺に寄進される『寺社方御用日記』（名古屋市鶴舞中央図書館蔵） ※現存の文殊菩薩坐像は19世紀制作とされる	
		元禄末頃、火災で焼失『大仏正法寺ノ記』（正法寺蔵）	
1713	正徳3	この頃には再建されたか	大仏殿内 千呆性佞坐像銘
1725	享保10	正法寺に参詣したとの記録「因幡誓願寺へ参、涅槃像拝見いたし候、正法寺えも参」『柴田日記』	
1787	天明7	惟中和尚（＝11代住持）が大釈迦如来像（大仏）の造立発願『金鳳山正法寺縁記』（正法寺蔵）	
1794	寛政6	大仏の頭部は下張され、五百羅漢像も200体ほどできる。大仏殿はまだない。 『加納藩士田辺氏見聞録』（加納藩士田辺政六）	
		この頃、大仏殿建立に伴い、道と水路が付替えられたか →正法寺の寺域が拡大「岐阜御山附近図」（岐阜県図書館蔵）	
1797	寛政9	大仏の頭と腕が完成途中。堂は縄張り、寄進された材木もみられる。五百羅漢像も少しできている。 『在邑中日記』（尾張藩年寄石河氏）（徳川林政史研究所蔵）	
1804	文化元		二重鬼瓦に「文化元」へう書き
1805	文化2	五百羅漢像を見てまわる 堂（＝大仏殿か）完成半ば『尾濃葉葉見聞集』（岐阜行路之記）（吉田正直）	
1810	文化7	大仏殿落慶「旧・岐阜市史」・「岐陽雅人伝」	
1811	文化8	浄土宗の徳本上人を迎え大仏開眼供養『徳本行者伝美濃化益記』	
文化7～8（建築当初）		単層裳階付き（外観二重）、正面向拝付き、正面唐破風造屋根なし、二重縁なし、身舎天井なし	
1815	文化12	惟中（大仏造立を発願した僧）示寂 →肯宗の代へ（12代住持）	
1823	文政6		唐破風天井画（雲龍図）銘
1824	文政7		大仏殿の最も古い参詣記録
1829	文政12	大仏と大仏殿完成、体内に薬師如来像を安置『金鳳山正法寺縁記』	
文政6～12（第一次増改築）		正面唐破風造屋根、内陣背面の二重への階段、二重縁、二重背面及び正面唐破風両脇の開口、二重内部正面の観相台、身舎天井の増築	
1832	天保3	開眼法会（第12代肯宗の代）尾州侯の使者参列「織田信長が金華山二入城以来ノ盛儀」『金鳳山正法寺縁記』	堂前の香台「天保三年」銘
1833	天保4	肯宗示寂	
1843	天保14	尾張藩主徳川斉荘による大仏殿修復「感興漫筆」	
1854	安政元	安政地震	
1858	安政5	（安政地震のため?）「大仏堂初め仏像等大破に及」 →大仏堂・仏像修理の勅化が尾張藩から許可され、触書が出される「白木家文書」（岐阜市歴史博物館蔵）	
1876	明治9	大仏殿修復のための修理費を募る「修理募金の趣意書」（岐阜県図書館蔵） 大仏殿は庇が崩れて倒壊の危険を思わせる状態	棟札墨書 初重鬼瓦・三重鬼瓦へう書き
1877	明治10		初重門扉墨書、初重・三重引戸墨書 須弥壇彫り
明治9～10（第二次増改築）※第13代殉泉の代		三重（二階）増築、二重及び三重への動線の変更 （内陣背面階段改造、斜路増設、二重背面階段室改造、三重への階段新設）、須弥壇の変更 ※建物全体の修理も実施	
1879	明治12	五百羅漢像の大規模な修復事業行われる	五百羅漢像墨書（明治12～14年）
1891	明治24	濃尾地震で被災 『殿堂傾斜シ幸ニ全倒ヲ免レタルモ、雨漏仏体ヲ浸潤シ四壁破壊ニ及ビ旧観ヲ失スルノミナラス殆ソト危ニ瀕シ』 『大仏殿修繕費喜捨金連名録』（正法寺蔵）	
1903	明治36	大仏殿修繕費の喜捨を呼び掛ける（市内有力者中心による）『大仏殿修繕費喜捨金連名録』	
1904	明治37	大仏殿修理「金鳳山正法寺大仏由来」	
1915	大正4	大仏殿が岐阜市の名所として紹介される「其の胎内は階段によりて、昇降し得らるなり」『岐阜名勝案内』	
1959	昭和34	伊勢湾台風で被災	
1960	昭和35	大仏殿修理（初重外周軒支柱の取付、屋根瓦の補修等）	大仏殿内揭示の銘板（大仏奉賛会）
1974	昭和49	大仏が岐阜県重要文化財に指定される	
1975	昭和50	大仏殿修理（須弥壇修理、小屋組補強、三重外壁補強、鳩除け金網取付等）	大仏殿内揭示の銘板（大仏奉賛会）
2014	平成26	正法寺が重要文化的景観「長良川流域における岐阜の文化的景観」の重要な構成要素になる	
2015	平成27	大仏殿が岐阜市重要文化財に指定される	

正法寺大仏殿・岐阜大仏の価値

1 大仏を安置するための 巨大な空間を持つ大仏殿



正法寺大仏殿 初層平面図



オルソ画像 正法寺大仏殿 東西断面

像高10mを超える大仏を安置するには、巨大な空間が必要です。大仏殿は、巨大大仏を安置するという目的で内部空間と構造が設計されました。八角形の通し柱を八角形に配して固めることにより大空間を形成していることが最大の特徴で、他に見られない固有の形式として評価できます。

2 大仏と大仏殿が一体の構造を成す 他に類を見ない独自性

粘土の上に紙(経文)や漆箔を貼り重ねて造られた大仏を風雨から守るためには、大規模な覆屋が必要なため、大仏殿は大仏と並行して建てられました。大仏の像内には「真木」と呼ばれる太い柱が立ち、大仏殿の小屋組を直接支持しているため、大仏殿と大仏は構造的に一体のものとしてみることができます。このような構造は、他に例がない大変ユニークな建造物です。



大仏と光背を貫く真木



大仏殿内に安置される五百羅漢像

3 五百羅漢を配し、羅漢堂の 機能を併せ持った大仏殿

羅漢とは、仏道を修行して迷いの世界を脱し、煩惱を断ち切った境地を得た人のことを言います。江戸時代には五百羅漢信仰が盛んになり、全国各地で五百羅漢像が造られました。

正法寺の五百羅漢像は、大仏と並行して造られました。当初は別の建物に安置されていましたが、昭和30年代に大仏殿内に移されました。現在残る108軀の像は、明治12年(1879)から同14年にかけて修理新調されたもので、明治9～10年の大仏殿・大仏の大規模修理事業の一環として行われたことが分かっています。

4 大仏殿内部を巡り、 近くから大仏を 参拝できる巡礼建築

江戸時代後期(18世紀半ば～19世紀半ば)、関東や東北で、さざえ堂と呼ばれる、仏堂の内部を巡らせて参拝させる建造物が登場し、庶民の注目を集めました。その中には、周囲の風景を眺める展望台としての役割を持ち人気を博したものもありました。

大仏殿における、文政期の増改築で設けられた階段の昇降を通じて二重縁から観相台へ導く参拝動線や、明治期の三重・斜路増築に伴う参拝動線の変更は、このような巡礼建築からの影響を感じることができます。



大仏殿内の斜路と観相台

5 江戸・品川海晏寺の合羽大仏制作の様子 合羽大仏の流れを汲む近世後期の見世物文化の遺例



11代惟中和尚が大仏造立を計画した時期は、江戸で合羽大仏と呼ばれる、見世物興行としての造り物が流行していました。合羽大仏は、岐阜大仏に造り方が似ており、大木を真木として、周囲を竹で籠を編むように大まかな形を作り、その上に桐油紙(＝合羽)を貼り重ねて制作します。

岐阜大仏を造る際には、この合羽大仏の技法を参考にしたのではないかと推測されています。

葛飾北斎 七々里富貴(下)
(早稲田大学図書館蔵)

6 大仏殿と大仏を造り、守り続けた 岐阜町の力量

大仏殿と大仏が完成した背景には、岐阜町が長良川を利用した物資の流通拠点であったことがあげられます。長良川上流からは材木・竹・和紙などが運ばれ、岐阜和傘や岐阜提灯といった伝統的工芸品が生まれました。大仏殿建立・大仏造立にあたっては、地域の人々による材料の寄進などの協力があつたと考えられます。

さらに、過去の大規模な修理や増改築も、岐阜町を中心とする地域の人々によって支えられ、今日の姿を保ってきました。

正法寺大仏殿と大仏の
現状記録などを目的として、
三次元測量を実施し、
測量データを活用した
紹介映像を作成しました。
詳しくはこちら → → → →



三次元測量データを使用した
正法寺大仏殿・岐阜大仏
(京都工芸繊維大学作成)

